

## 月例研究発表要旨

第 103 回 昭和 57 年 1 月 27 日 「GENIUS LOCI」

磯地明雄

英国の印象として強く残るものに、'village' と 'hills' とがある。共にこの足で歩いてみて初めてその幾分かを理解しえたように思う。一方、人間存在への視点として、力強い現実性と、逆に一種独特な超現実的世界への傾きの如き物とを併せもつ心性が英国人にはある。これらの点を二、三の詩の中に探ってみたい。

英国各地に点々と、ひっそりと静まり返る 'the English village' の数々は、この国が誇りうる一大文化であり、最も大きな魅力の一つと言えよう。そこに漂う落ち着いた静けさと頑固なまでの古さの維持は、今日の英国の国力の衰退と、そして同時に英国という国のもつ魅力とを併せて象徴するものかもしれない。

ロンドンの南東四、五十キロの処に Yalding という小さな村がある。Edmund Blunden の郷里である。彼の小品二篇を引く。

## A DREAM

Here's the dream I love—  
 Stay, old Sleep, allow me this,  
 One more moment—godlike bliss.—  
 Here's the dream I love.  
 Tell me then this dream?  
 O, it's nothing, nothing at all,  
 But I was walking young and small  
 In the landscape like a dream.  
 What especial scene?  
 None especial; pure blue sky,  
 Cherry-orchards, a brook runs by,  
 And an old church crowns the scene.  
 Only that? If so,  
 All would be well; but swiftly changed,  
 The whole is banished and estranged.  
 I wake, it is not so.

詩人の言う通り、別に特別の情景ではない。「青い空、果樹園、小川が傍を流れ、古い教会がこの光景に画竜点睛の趣きをそえている」ただそれだけである。そしてこれが概ね 'village' の典型であり、何処でも見られる風景である。だがこれを 'godlike bliss' とみる感覚が英国人にはある。これを守るのが文化というものだろう。(今この小さな教会の内陣に Blunden を偲ぶ美しい 'memorial window' がある。一枚は氏の作品一篇、一枚は戦争と平和を象徴する画像。共にガラス上のエッチング。)

## THE MIDNIGHT SKATERS

The hop-poles stand in cones,  
 The icy pond lurks under,  
 The pole-tops steeple to the thrones  
 Of stars, sound gulfs of wonder;  
 But not the tallest there, 'tis said,  
 Could fathom to this pond's black bed.  
 Then is not death at watch  
 Within those secret waters?  
 What wants he but to catch  
 Earth's heedless sons and daughters?  
 With but a crystal parapet  
 Between, he has his engines set.  
 Then, on, blood shouts, on, on,  
 Twirl, wheel and whip above him,  
 Dance on this ball-floor thin and wan,  
 Use him as though you love him;  
 Court him, elude him, reel and pass,  
 And let him hate you through the glass.

第一連の静寂と神秘に始まり、生の躍動がリズムカルに疾駆する第三連へともり上る、この音楽的な律動は見事である。そこには深く冷やかな神秘感と、同時に、人の生への力強い意志への賛歌がある。これ又、英詩の一特色と言えよう。

今ひとり、Walter de la Mare から二篇を引く。

## THE RAILWAY JUNCTION

From here through tunnelled gloom the track  
 Forks into two; and one of these  
 Wheels onward into darkening hills,  
 And one toward distant seas.  
 How still it is; the signal light  
 At set of sun shines palely green;  
 A thrush sings; other sound there's none,  
 Nor traveller to be seen—  
 Where late there was a throng. And now,  
 In peace awhile, I sit alone;  
 Though soon, at the appointed hour,  
 I shall myself be gone.  
 But not their way: the bow-legged groom,  
 The parson in black, the widow and son,  
 The sailor with his cage, the gaunt  
 Gamekeeper with his gun,

That fair one, too, discreetly veiled—  
 All, who so mutely came, and went,  
 Will reach those far nocturnal hills,  
 Or shores, ere night is spent.

I nothing know why thus we met—  
 Their thoughts, their longings, hopes, their fate:  
 And what shall I remember, except—  
 The evening growing late—

That here through tunnelled gloom the track  
 Forks into two; of these  
 One into darkening hills leads on,  
 And one toward distant seas?

夕暮れのある田舎の鉄道分岐点。一群の乗客は、夕闇せまる荒野へ、あるいは遠くの海辺へ、今しも去り、詩人ひとりぼつんとホームに残る。一羽のツグミの声の他物音ひとつなし。乗客一人一人の姿は妙にリアルである。皆黙ってやって来て、去った。詩人も又やがていずこかへ出発すると言う。何か不思議な寂寥感と、人間存在の孤独を浮び上らせ乍ら、しかも凜としてそれを受けとめようとする響きがある。

英語の 'hills' (cf. 第一, 第五, 最終連) は暗く冷たい寂寥の響きと、同時に、何処か広い大きな世界に繋がる何かを蔵しているようである。Nursery rhyme の 'Over the hills and far away'——このただの一行が何世紀にも渉り人々の心を捉えてきた所以だろう。

#### THE SONG OF THE MAD PRINCE

Who said, 'Peacock Pie'?  
 The old King to the sparrow:  
 Who said, 'Crops are ripe'?  
 Rust to the harrow:  
 Who said, 'Where sleeps she now?  
 Where rests she now her head,  
 Bathed in eve's loveliness'?—  
 That's what I said.

Who said, 'Ay, mum's the word';  
 Sexton to willow:  
 Who said, 'Green dusk for dreams,  
 Moss for a pillow'?  
 Who said, 'All Time's delight  
 Hath she for narrow bed;  
 Life's troubled bubble broken'?—  
 That's what I said.

この詩は fairy-tale のもつ美しさと, nursery rhyme のもつノンセンスを基調とした

がら、人間世界の現実たる死の悲しみと、その毅然たる受容を歌って、不思議な魅力に富む。厳然たる時の流れ（'Rust to the harrow'）と永遠性（'All Time's delight'）、薄明の美とドライな現実性、これらが渾然となり、最後の 'Life's troubled bubble broken' という痛切な響き、'That's what I said' のもつ、涙に対する拒否、詩全体の底流を成す悲しみを拒む意志、に定まる所がよい。

このような一種の神秘の感覚と、具体的な人間存在の毅然たる受容、ともに英詩の抒情性の基本を成すものと思われる。その背景にはドライな現実感覚と、したたかなユーモアとの結びつきがある。英国人の好む言葉の一つに 'robust' があり 'brisk' がある。それは 'hills' を渡る風の響きであり、彼らの言葉のもつ響きである。

#### 第104回 昭和57年5月26日 「語順と文の構成要素」

重藤 実

人間の用いる言語記号は、音と意味とを結び付ける機能を持っている。この機能は、形態素のレベルでも文のレベルでも同じように存在すると考えられる。

言語記号は音と結び付いているので、線状性を持っている。これはソシュールの「一般言語学講義」で言語記号の性質の第二原理「能記の線的特質」としてもはっきり示されており、自然言語が必然的に持っている性質の一つだろう。形態素のレベルでは分節音素が時間軸にそって一列に並んでおり、文のレベルでは形態素がやはり一列に並んでいることも、この線状性の原理によるものである。

しかし自然言語は、この線状性という原理からのみ成り立っているわけではない。音のレベルにおいても超分節音素の存在は古くから知られているし、弁別素性などを考えても、人間の言語には線状性を越えた原理も働いていることがわかる。統語構造においても二次元的な句構造が考えられているし、意味のレベルでは線状性がどのように現れているのか、よくわかっていない。もっとも統語構造においてはもちろん、意味のレベルにおいても、線状性が全く現れないわけではないだろう。音のレベルに付随する原理ではあっても、他のレベルにおいてもこの原理を利用した方が文法理論としては簡潔になるのであり、より自然な理論であると言える。

統語構造における文の構成要素の配列については、比較的自由的な言語と、比較的制約の強い言語の存在が知られている。たとえば語形変化の豊富なラテン語は語順が比較的自由であり、語形変化の少ない英語は語順の制約が比較的強いと言われている。これは自然言語に見られる傾向を基本的には正しく言い表わしたものでしょう。

しかしこのような表現には「意味の区別に役立つ場合にのみ、語順の制約が存在する」という前提が隠されている場合が多いようだ。けれどもこの前提は正しいとは限らない。言語記号は音と意味とを結び付けるものなので、音に関して必然的に存在する語順が意味の区別にも役立つのが自然ではある。しかし線状性は人間の言語にとって必然的なものであり、意味に従属しているわけではない。線状性の原理の働いていない意味構造があるのと同じように、意味の区別に役立つ語順の制約があっても全く不思議ではないのである。もっとも意味にもさまざまな側面があり、知的意味に限らなければ、どのような語順の変化でも意味の区別に役立っていると言ってもいいのかもしれない。

ドイツ語の語順は、動詞については制約が強いけれどその他の成分については比較的自由だと言われている。しかし動詞以外の成分についても、語順は決して全く自由なわけではなく、いろいろな場合について複雑な分類が必要である。また動詞の位置についても、どの語順を基本的なものとするのかについて論争が続いている。

SOV 説, SVO 説, VSO 説の論争では、ドイツ語の文を記述するための有効性ととともに、一般理論との組み合わせも常に問題となっている。たとえば Gapping に基づく SVO 説, Penthouse Principle に基づく SOV 説などについては、文法理論に与える影響が大きいため論争が絶えない。しかしドイツ語の記述という目的のためには、助動詞構造の分析などに基づく SOV 説が有力だと考えられる。

ドイツ語の基底構造として、線状性がなく構成要素構造のみから成るモビール型の文法モデルを提案している人々もいる。しかしそれはドイツ語の記述に不適當であるだけではなく、自然言語の持つ線状性の原理を無視しているという欠点がある。ラテン語などでも語順は決して全く自由というわけではないし、自然言語には、文の要素をどのように配列しても全く同じ意味となるような言語は存在しないと考えられる。モビール型の文法モデルは、言語記号における音の特質を無視した文法理論なのである。

#### 第 105 回 昭和 57 年 6 月 23 日 「漢字をめぐる諸問題」

松本 昭

1. 表音と「表意」
2. 中国語表記としての漢字
3. 漢字の数（異体字・簡体字など）
4. 日本語表記としての漢字

文字である以上、すべての文字は窮極において、言語を表わすためのものであるが、その表わし方の差異によって、表音文字と「表意」文字に分けられている。前者は個々の文字を幾つか連続（スベリング）することによって、（有意味的な）言語形式のある単位の（発音）語形を暗示する仕方と言語を表わし、後者は個々の文字が単独で直接的に言語形式のある単位（時にはその一部分）を示す仕方と言語を表わしている。

（音声）言語は時間の流れの中に音波という連続体としてあらわれる。その言語を文字によって、写定するためには、人間はそれをさまざまなレベルにおける単位の区分せざるをえない。☆音声の特徴、☆音段（分節音）単音、☆音節 といった、意味を捨象した単なる音声的レベルの各単位に対応させたものが、いうところの表音文字であり、☆有意味的な最小単位（形態素）以上の言語形式に対応させたものが「表意」文字であると言いかえることができる。

その意味で後者は「表意」文字というよりは「表語」文字というべきだという考えが、今や次第に定着しているように思われる。このことの妥当性を、「表語」文字の代表としての漢字の、中国語表記、日本語表記の実態のいくつかの側面から説明してみたいというのがこの報告の主要に目指したところであった。



なお、昭和 57 年 2 月 17 日に、磯野研究館大集会室にて山川喜久男教授の退官記念講演「英語の語順——統語法史上の一課題として」がおこなわれました。

また本年度は、新しいメンバーとし、松本昭氏、佐野泰雄氏をお迎えしました。